

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K12426

研究課題名（和文）ウェルネスツーリズムの学術基盤構築に関する研究

研究課題名（英文）Study on construction of academic base for wellness tourism

研究代表者

荒川 雅志（Arakawa, Masashi）

琉球大学・国際地域創造学部・教授

研究者番号：70423738

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：観光分野研究者、観光関連機関からの定義が主で、目的、行為の説明に主眼が置かれていたウェルネスツーリズムの定義に対し、本研究ではウェルネスツーリズムはウェルネス産業と観光産業の2つの大きく成長する産業を掛け合わせて相乗効果を発揮する融合分野（荒川, 2023）と解釈し、ある観光形態の呼称ではなくウェルネス（輝く人生への様々なアクション）をメニュー、プログラムとして旅行・滞在を通して提供しウェルビーイング（よりよい状態）へ導く総称である新しいアフターコロナのウェルネスツーリズムの定義を確立した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ウェルネス産業の視点からのウェルネスツーリズムに関する明確な定義がこれまで存在していなかった。欧米中心からアジアの時代における新しい視点から、コロナを経た世界、社会、価値観の一大転換期として、新しい時代のウェルネスツーリズムを日本から発信していくことは大きな意義があると考えられた。

研究成果の概要（英文）：In contrast to the definition of wellness tourism, which has been mainly defined by researchers in the tourism field and tourism-related organizations, and which has focused on explaining the purpose and actions of wellness tourism, this study interprets wellness tourism as a fusion of the wellness and tourism industries (Arakawa, 2023), which is a synergistic effect of combining two large and growing industries. This study established a new definition of after-corona wellness tourism, which is not a name for a certain type of tourism, but a generic term for wellness (various actions for a brighter life) offered as a menu or program through travel and stay, leading to wellbeing (a better state).

研究分野：ウェルネスツーリズム

キーワード：ウェルネス ウェルネスツーリズム ウェルビーイング ウェルネス産業 スパツーリズム ヘルスケア
well-being wellness tourism

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) ウェルネスツーリズム研究の背景

国際ウェルネス機関 (Global Wellness Institute、以下 GWI) の統計では、ウェルネスツーリズム参加者は一般の観光者に比べ旅行支出額は 159% と高く、経済波及効果は 1.5 兆ドルと大きく、雇用効果は 3,280 万人分に相当することが試算されている。世界中のあらゆるビジネス分野が「ウェルネス」への接近を試み、ツーリズム業界でも世界の主要なホテルチェーンがウェルネスを前面に打ち出したメニュー開発、サービスを提供しはじめている。実際にウェルネスツーリズムを謳う観光形態では、食、運動、保養、温泉、SPA (スパ)、スポーツ、レクリエーションや文化的活動、相補代替療法から西洋医療の一部に至るまで様々なプログラムが提供されているが、GWI の発表資料によると、現在世界中で行われているウェルネスツーリズムの 47%、およそ半分はスパツーリズム (スパサービスを求めている旅行) であることが報告されている。

ウェルネスツーリズムの起源には、紀元前、古代ローマの戦士達の傷や病気の治療に効果的な温泉入浴 (SPA) や郊外に展開した公衆浴場への旅に遡り、中世に入ると温泉の医学的効果に基づく温浴文化、18 世紀頃には王侯貴族の高級保養地への滞在や都市形成のテーマとして発展を遂げた。こうした世界的潮流、市場規模などの研究は欧州及び米国が先行し、歴史的経緯や海外動向の最新を示せる国内研究者は本研究者の先行研究以前には皆無であった。

ウェルネスツーリズムが今後成長著しい観光形態との各関係機関の報告をもとに、我が国も注力していくべきであり、欧米中心からアジアの時代における日本アジアのウェルネスツーリズムの独自性を議論し、世界に優位に提供しうる価値を学究していくことは関連業界からも待望されている。

(2) ウェルネス研究の背景

先行研究論文、国際学会発表および国際会議への招聘発表をもとに、「ウェルネスツーリズム～サードプレイスへの旅～」(荒川,2017) 年を執筆したなかでウェルネス、ウェルネスツーリズムについての最新の定義を提唱した。ウェルネスとは、健康を身体の側面だけでなくより広義に総合的に捉えた概念で、1961 年に米国のハルバート・ダン医師が『輝くように生き生きしている状態』と提唱、その後、世界中の研究者らがウェルネスに追定義を重ね、社会情勢、時代によって人々のライフスタイルと価値観も変容していくなかでその概念も変化してきている。本研究者は「身体の健康、精神の健康、環境の健康、社会的健康を基盤にして豊かな人生 (QOL) をデザインしていく生き方、自己実現」として、人種、民族、国家、性的多様性、宗教、言語の違いを超え、多様な志向層に支持され、多様なプレーヤーが参画できる新たなウェルネスの輪郭を提起した。

医学者や健康、体づくりの分野からのウェルネス研究や普及啓発が主だったのに対し、ここ数年では SPA (スパ) 産業界、飲食業界、観光業界をはじめあらゆる産業分野から注目が高まってきている。新しいウェルネス概念で俯瞰すると、健康医療はもちろんのこと、衣・食・住といったライフスタイル、さらには経済社会、文化、環境のウェルネスに至るまで、あらゆる分野から参入可能なテーマとなり、多業種、多職種、異業種の連携、相互交流によるサービスイノベーション創出、新市場開拓の可能性が広がっていくことが各種市場動向から示唆されている。ウェルネス産業はヘルスケア市場を包含し、2018 年の最新レポートでは 4 兆 2 千億ドル (≒462 兆円) と極めて巨大となっている。成長著しいウェルネス産業のなかでもウェルネスツーリズムの伸びが顕著であることが各種調査で報告されているが、ウェルネス産業の視点からのウェルネスツーリズムに関する明確な定義がこれまで存在していなかった。科学研究費助成事業データベースにおいてウェルネスツーリズムを含む研究課題は僅か 4 件である。

2. 研究の目的

先駆的にヘルスツーリズム、ウェルネスツーリズムの実証研究を進めてきた本研究者の先行研究をもとに、本研究ではウェルネスツーリズムプログラムのエビデンステーブル構築、ウェルネスツーリズムのモニターツアー検証、新しいウェルネスツーリズムのモデル提示を行い、ウェルネスツーリズムの学術基盤構築をおこなう。

3. 研究の方法

ウェルネスツーリズムプログラムのエビデンステーブル構築では、ウェルネスツーリズムを構成する主要プログラム（SPA、温泉、海洋療法、食養生）分野をカバーする医科学文献データベースはこれまで存在しないことから、システマティックレビューを専門とする本研究者および複数の疫学研究者によりウェルネスツーリズムプログラムのエビデンステーブルを作成、医科学的根拠の基盤を構築する。ウェルネスツーリズムのモニターツアー検証では、初年度エビデンステーブル情報を基に、本研究者が過去に産官学連携でフィジビリティスタディを実施したウェルネスツアーをモデルに、日本の地域特性を活かしたウェルネスツーリズムモニターツアー検証を実施する。新しいウェルネスツーリズムのモデル提示では、国際ウェルネス機関（GWI）、海外研究者の協力のもと海外事例をもとにして新しいウェルネスツーリズムモデル提示の可能性を検証、研究全体の総括を行う。

4. 研究成果

(1) エビデンステーブル作成

国内文献情報 CiNii、医学中央雑誌から、対象キーワードとしてウェルネスツーリズムおよびウェルネスツーリズムを構成する主要プログラムについて対象は無作為で対照群を設定した RCT（Randomized Controlled Trial）研究およびコントロールされた介入研究を抽出した。RCT 研究は極めて少なく、効果訴求型の期待に応えられるウェルネスツーリズム研究の必要性が示唆された。

(2) ウェルネスツーリズム授業開発

コロナ禍で健康効果評価などを旅行移動、対面での生理的定量的に評価するモニターツアーが困難であったことから、ウェルネスツーリズムの軸となるウェルネス研究レビューを実施、ウェルネス概念の整理からポストコロナの新しい時代のウェルネス、ウェルネスツーリズムを発信する 2 本の寄稿論文にまとめた。またアジアのウェルネスを議論していく海外研究者との共同研究は対面からオンライン形式に変更し順調に進めることができ、韓国東亜大学 Kang Hyung Sook 教授との共同研究ではウェルネスツーリズムを構成する主要なコンテンツとして温泉（SPA）に着目し、移動が制限されるなかで沖縄の温泉の最新状況をすべて取材、論文執筆をおこなった。共同研究の一環として韓国の大学で初の正規授業ウェルネスツーリズム論をカリキュラム共同開発、釜山の東亜大学ほか 3 大学で開講した。

(3) ウェルネスツーリズムの新しい定義提唱

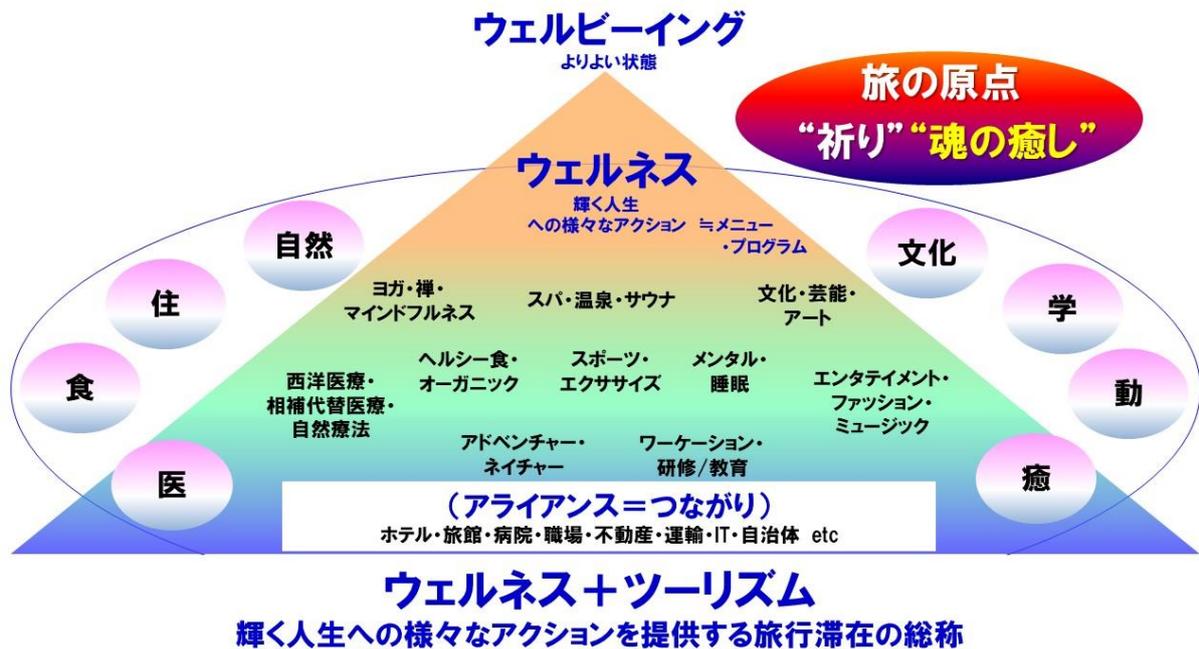
研究最終年度では、ウェルネスツーリズム分類、モデル提示をおこなった。海外ウェルネスツーリズムの定義や実践例を海外研究者の協力のもと網羅的に収集し、日本型といえるモデル提示の可能性を検証、研究全体の総括をおこなった。Wolfgang(2004)は、「余暇活動の時間においてヘルスケア、治療・回復、リラクゼーション、食事療法、運動、スキンケア、美容などで構成したツーリズム」とし、行為の具体例を挙げて説明している。世界観光機関（2018）では「身体的、精神的、感情的、職業的、知的、そして霊的なものを含む人間の生活のすべての主要な領域を改善し、バランスをとることを目的とした観光活動。ウェルネスツーリズム旅行者の主な目的は、フィットネス、健康的な食事、リラクゼーション、自分への褒美、癒しトリートメントなど、予防的、積極的でライフスタイルを向上させる活動に従事すること」と定義される。海外事例にあるヨガ、スパ、瞑想、健康的アクティビティなどはウェルネスツーリズムのイメージを想起する代表例ではあるが、ウェルネスの概念の変化とともに定義も変わっていくのが自然な流れである。特にコロナ禍でツーリズムは壊滅的打撃を受け一大変化がおきた。ウェルネスとは高次元の欲求、自己実現に向かう人生のデザインであり、上位概念として広い円を描き基盤欲求であるヘルス（健康）やメディカル（医療）を包含したものと位置づけられ、人生の質を高める、豊かな人生をデザインしていく「ライフスタイル」全般が対象であり、提供されるプログラムも広範囲かつ多様なものになる。そのうえでウェルネスツーリズムとは、ある観光形態の呼称ではなく、ウェルネス＝輝く人生への様々なアクションとして、それらをプログラムとして旅行・滞在を通してウェルビーイング（よりよい状態）へ導く総称と捉えることと提唱した（Arakawa M. 2023）。

(4) 研究総括

本研究期間に新型コロナ感染拡大という未曾有の大災害を経て、基盤的欲求である安全安心、健康、医療へのニーズとともに、新しい生き方、働き方への欲求、次世代ライフスタイルを志向するウェルネスのニーズは高まっている。旅を通して心身の健康、ウェルビーイング（よりよい状態）へ導く様々なプログラムを提供するウェルネスツーリズムの需要が世界的に高まっている各種報告を背景に、多様な分野、事業者が参画できるアフターコロナ時代の新しいウェルネス、ウェルネスツーリズムを提案することができた。

Wolfgang Nahrstedt (2004)、世界観光機関 (UNWTO, 2018) など観光分野研究者、観光関連機関からの定義が主で、目的、行為の説明に主眼が置かれていたウェルネスツーリズムの定義に対し、本研究ではウェルネスツーリズムはウェルネス産業と観光産業の2つの大きく成長する産業を掛け合わせて相乗効果を発揮する融合分野 (荒川,2023) と解釈し、アフターコロナのウェルネスツーリズムとして提供する価値の強調を図り、アフターコロナの新しいウェルネスツーリズムの提唱をおこなった初の研究である。

ウェルネスツーリズムとは、ある観光形態の呼称ではなく、ウェルネス＝「輝く人生への様々なアクション」をメニュー、プログラムとして旅行・滞在を通して提供しウェルビーイング（よりよい状態）へ導く総称であること、輝く人生への様々なアクションには、ヨガ、マインドフルネス、禅、祈り、医療、ヘルスケア、スパ、温泉、サウナ、文化、芸能、アート、ワーケーション、研修、教育、アドベンチャー、ネイチャー、エンタテイメント、ファッション、ミュージックなど様々な人生に彩りを与えるウェルネスを提供するアクションがあることを事例的に提示した (図1)。コロナを経た世界、社会、価値観の一大転換期として、新しい時代のウェルネスツーリズムを日本から発信していくことは大きな意義があると考えられた。



1) Arakawa M. Chapter 20. "What is Wellness & Wellness Tourism?" Handbook of Japanese tourism. MHM Limited 2023.
 2) 荒川雅志. アフターコロナの旅と健康～ウェルビーイングを達成する新しいウェルネス、ウェルネスツーリズムの定義. Precision Medicine. 6(2), 59-62 2023.

図1. 新しいウェルネスツーリズムの定義 (Arakawa M. 2023)

<参考文献>

- 1) Arakawa M. Chapter 20, What is Wellness & Wellness Tourism? Handbook of Japanese tourism. MHM Limited 2023.
- 2) 荒川(2023). アフターコロナの旅と健康～ウェルビーイングを達成する新しいウェルネス、ウェルネスツーリズムの定義, Precision Medicine. 6(2), 59-62.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 荒川雅志	4. 巻 58(35)
2. 論文標題 ウェルネスの本質	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 TRAVEL JOURNAL	6. 最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒川雅志	4. 巻 22(5)
2. 論文標題 ヘルスケアからウェルネスへ 不動産プレーヤーは脱皮を図れ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 プロパティマネジメント	6. 最初と最後の頁 19-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒川雅志	4. 巻 3(10)
2. 論文標題 旅の力を活かした新たな健康増進,ウェルネス健康経営プログラムの開発：ウェルネスツーリズム・ウェルネスサードプレイスの実際	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Precision medicine	6. 最初と最後の頁 905-910
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒川雅志	4. 巻 70(5)
2. 論文標題 成長するウェルネス産業市場	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 商工金融	6. 最初と最後の頁 54-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒川雅志	4. 巻 6(2)
2. 論文標題 アフターコロナの旅と健康～ウェルビーイングを達成する新しいウェルネス, ウェルネスツーリズムの定義	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Precision Medicine	6. 最初と最後の頁 59-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------